



公立高入試 後期試験がんばれ!

―― 後期で合格した先輩の声 ――

★A・T君 新松戸教室 中三 Sコース在籍

(進学先) 県立東葛飾高校

先生たちはみんな優しく、すごくおもしろい。僕は創学舎 新松戸教室にいたからこそここまでくることができたと思う!それともう一つ僕が合格できた理由がある。それは、誰よりも努力したからだ。僕は特別な天才ではなかったのに、努力が報われないときもあった。しかし、諦めなかった。悔しいときは泣きまくって、嬉しいときは跳びはねて喜んで、そして、志望校に合格した。これから受験を迎えるみんなに一言、受験を乗り越えるために、みんな、気合を入れていけよ!自分がNo.1だと思って誰よりも努力しろ!辛くてもきつくても絶対に諦めるな!

★S・Mさん 柏教室 中三 A1コース在籍

(進学先) 県立柏高校

いつ質問しても快く答えて教えてくれたのが私にとっても良かったです。また、前期で不合格だったときに点数が悪かった教科の先生が相談ののってくれたり、励ましてくれたりして、精神面でとても支えられました。後期直前では、色々な先生が応援してくれて、私も「頑張ろう。」という気持ちになることができました。結果は見事合格!自己採点では点数が前期よりも70点も上がり、すごく嬉しかったです。結果が出た後にも

「本当に良かったですね。」などのあたたかい声をかけてもらい、心から創学舎に入って良かったなあと思えました。V模擬でも40%だった第一志望の高校に合格できて幸せです。ありがとうございます!

★S・Mさん 新柏教室 中三 A1コース在籍

(進学先) 県立中央高校

前期試験では直前まで第一志望校を下げるか悩みましたが、その自信がなかった志望校に挑戦できたのは、先生方が背中を押してくださいました。前期試験は落ちてしまいました。後期試験までの10日間、毎日塾に通い合格を目指しました。自分専用の予定表を作ってくれたり、毎日さまざまな先生とコミュニケーションがとれたことで、とても励まされました。そのおかげで後期試験は合格することができました。



★K・Y君 我孫子教室 中三 S2コース在籍

(進学先) 県立小金高校

私は創学舎に入った当初、偏差値が55で、進学先である小金高校の合格可能性は20%以下でした。しかし創学舎の分かりやすく、丁寧な授業を受けて次第に偏差値が上がっていきました。また、充実した副教材と宿題によってテスト問題の解き方が分かってきました。

そうした創学舎のサポートを受け、私の偏差値は上がり、小金高校の合格判定はBになりました。残念ながら前期は落ちてしまい、私は後期で失敗したらどうしようという不安に押しつぶされそうになってしまいました。このままではマズイ、そう思ったときに、創学舎の先生方は「合格を勝ち

とってこい」と言ってくれたり、私の不安を吹き飛ばしてくれました。こうした先生方の支えにより、私は小金高校に後期で受かることができました。創学舎には本当に感謝していると同時に、入って良かったと心から思っています。

★K・Nさん 新松戸教室 中三 A1コース在籍

(進学先) 県立小金高校

私は前期で第一志望の小金高校に落ちました。理由はたくさんあったと思います。でも、一番大きな理由は「不安があつて勉強に集中できなかったこと」だと思います。後期の受験が決定してから、私は毎日創学舎に通いました。疑問が出たら先生に質問し、すぐに先生が解説してくれました。毎日不安を感じる暇がないほど勉強しました。でも、ふとしたときに不安はおそってきます。これから受験を経験するみなさん、不安に負けずに頑張ってください。頑張ればきっと結果は出ます!創学舎の先生方がサポートしてくれたおかげで後期はそのまま小金高校にチャレンジして受かることができました。ありがとうございます!

★C・T君 新柏教室 中三 Sコース在籍

(進学先) 県立東葛飾高校

私は今まで努力が目に見える形となつて現れたことがなかった。いつも学校のテストでも「あんなに頑張ったのに。」と思っていた。しかし、創学舎に入ってから、勉強への取り組み方が180度変わった。数学の先生がいつも私に、「正しい努力をしなさい」と言ってくれた。だから、副教材を繰り返して何度も解いた。初めはVもぎで偏差値が52しかなかったが、十二月頃には65くらいにまで上がった。今まで自分がやってきたことは、「努力したつもり」であつて、正しい努力ではないことを痛感した。

一番苦しかったのは後期入試までの期間だった。毎日、学校の昼休みも勉強し、眠っている間にライバルに抜かれそうで、恐かった。しかし、本番直前は先生が手紙をくださり、本当に全力で勝負に挑むことができた。仲間も皆フレンドリーで支え合いながら勉強できた。

本当に創学舎に來なかつたら、志望校に合格できなかった。創学舎で正しい努力を教えてもらつて、本当によかつたと思う。今までありがとうございます。先生方には感謝してもしきれません。

★S・T君 江戸川台教室 中三 A1コース在籍

(進学先) 県立小金高校

僕がこの塾に入ったのは、中学三年生の春でした。親に受験が近くなつたからと言われて通いました。僕は当初、塾は面倒で、辛いところというイメージしかありませんでした。でも、先生達の授業がおもしろく、それまでのイメージが逆転し、塾に行くのが面倒ではなくなりました。受験も近づくにつれて、難しい応用問題などが出てきて、つまずくこともありましたが、その度に先生が丁寧に教えてくれました。そのおかげで、ミスした原因やどこが苦手なのかということが分かるようになりまことが分かるようになりましました。そして、むかえた入試当日、先生がわざわざ受験校の門まで来て応援してくれました。感激しました。

しかし、緊張していたせいか、ケアレスミスが十個くらいあり、前期入試は不合格でした。だから、先生に言われたとおり、自分のミスの癖を後期に向けて探しました。すると、自然とミスが減り、後期ではミスを減らすことができました。今では、この塾に入って本当に良かったと思っています。今まで本当にありがとうございました。



我がが教室の至宝②

個別指導パーソナルで活躍する講師の横顔を紹介いたします。今回は、パーソナル我孫子、布施 おおたかの森、の各教室の講師陣の中から、数名ずつご紹介いたします。

■パーソナル我孫子教室

【T. K. 先生】留学経験があり、広い視野で物事を把握し、落ち着いた雰囲気を進める授業が特長。

【Y. S. 先生】その甘いマスクから放たれる論理的な説明にファンが続出か？

【M. T. 先生】他の講師がやむを得ず休んでしまったときや、他教室への助っ人など、困ったときになくてはならない、なんでもこなしてしまう頼れる男。

【H. S. 先生】印象は、まるで可憐な花のよう。しかし、しっかりとした芯を持つ。母親のような安心感が生徒に好評。

■パーソナル布施教室

【T. A. 先生】存在感抜群。創学舎での生徒時代にしっかりと勉強していた経験を、きちんと生徒に伝えてくれる頼もしい存在。

【U. H. 先生】一見静かな印象だが、火が付くと泣く子も黙る熱血指導が始まる。女子生徒からは、「先輩」と呼ばれていたことも(なぜ?)。

【N. H. 先生】イケメンかつスポーツマンでありながら性格は実直。使命感を持って授業を展開してくれる。



■パーソナルおおたかの森教室
【K. A. 先生】話が面白く、知識が豊富で生徒に真正面からぶつかっていく熱血漢な講師。
【K. S. 先生】笑顔が素敵で優しい雰囲気があるが、熱いハートを持った講師。

■中学三年生の中には、千葉県後期入試や埼玉県・茨城県の入試も控えている人もいることでしょう。しっかりと頑張ってください。入試が終わった人たちは勉強は続いていますか。高校入試は、まだまだ人生の一通過点にすぎません。一生懸命に努力して身につけた知識を忘れないように、ぜひ私たちの教室に学びに来てください。

奈良漬汁

●初めて来た大阪の街。五日目の夜だった。急がなければ。早くこれを食べさせなければ…。「奈良漬汁が食べたい…。」あの人の言葉が響く。街はこの日も雨。五月というのにこの冷たさは…。右も左もわからず飛び出した。十軒近く回ってようやく見つけた。そういえばいつもお茶を飲みながら美味しそうに食べていた。急がなければ…。

●「さかえさん、あつたよ。今切つてあげるからね…。」
「どう、美味しい?」
「ああ、美味しい…。ありがとう、よしのさん…。」

力なくゆっくり奈良漬汁を食べる
さかえさん。無口でいつもここにこしている人だったが、その笑顔は変わらない。あと何日、こう



して過ごせるだろうか。明日は一番高い奈良漬汁を買いにいこう。

●次の日の朝、さかえさんは亡くなった。

☆ ☆ ☆

●これは、五十年前の出来事。さかえさんは私の父、よしのさんは私の母である。一緒に住んだのは三年余り。事情があり、さかえさんは家を離れて大阪で働くこととなった。いつしか仕送りもなくなり、便りも途絶えた。さかえさん、よしのさんと呼び合う二人の関係はよくわからないところもある。しかし、二人はお互いを大切に思っていたことは確かだ。

●小さい時から父が帰ってこないことへの疑問はいつも心の中にあつた。それでも、他の人が父のことに触れたときの母の表情のそのわずかな変化は、これは聞いてはいけないことだと私に思わせた。そして父は、私が小五の時に亡くなる。

●それから私は(今思えばそれまでも)、二人の関係や父の人生に思いを馳せ、少しずつその断片を集める、そして繋ぐことを時々してきたようだ。

父についての直接の記憶は、小三の時の数時間だけ。今後のことを話し合うために、二人の仲人をして人を連れてきたことがあつた。大人達の話し合いが続き、私達兄弟とは言葉をほとんど交わすこともなく、また行ってしまった。でもそのとき、大切な贈り物をくれた。見送る私達の前を走りゆく夜汽車の窓から、「けんちゃん、しんちゃん」と私達兄弟の名前を叫びながら父は見えなくなつ

た。私はただただ悲しかった。母も弟も祖父も泣いていた。みんな無言だった。そして、今思えばあの夜こそ、私にとっての支えであつた。あんなに哀しく温かく強い声を他に私は知らない。



●因みに冒頭の場面は、父方の親類の知らせで父の死を看取りに行つて帰ってきた母が、その夜に語つたことの一部である。(何故こんなことを覚えているのだろうか、思うこともある。)きつとこれからも先述の作業は続くはずだ。近いうちにまた母のいる鹿児島に帰るが、そのときも父の断片を拾うことになる。母も私にそれを伝えたがっているようだ。

●いろんな家族の在り方がある。私の父と母の在り方もその一つ。とてもよかったと思うのは、母が父の悪口を一言も言わなかったこと。そして大阪にいる父は、知人を通して私達の情報を集めて喜んでくれたということ。学級委員長になったとか、賞を貰つたとか聞いては自慢していたということが断片を繋いでいく中で、父にも愛されていたことが分かつた。

●「五三三ヒ(五月二十三日) 昼、サカエ シス ヨシノ」
父が亡くなって届いた電報である。こんなことも私は覚えてる。(小林)

▼▲継続希望の方へ▲▼

- ▶退塾や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送りいたします。
- ▶在籍していた教室までご連絡ください。